

海外ニュース

ネパール王国における果樹研究機関とその活動の現況

1992年11月から始まったJICAが行うプロジェクト「ネパール園芸開発計画」に参加し、主に日本からナシ、カキ、ブドウなど落葉果樹の導入・普及及びネパール原産のオレンジの一種“ジュナル”，ポンカン的一种“スタラ”の優良系統の選抜とそれらの普及に携わっている。

赴任以来、1年数か月間にかいまみた、この国の果樹農業及び関連試験研究機関の現状を紹介しよう。

1 ネパール王国における果樹産業

プロジェクトが関係する地域の農家1戸当たりの平均土地保有面積は、首都カトマンズ近郊で50a以下が全体の83%を占め、プロジェクトから最も離れたラメチャップ地区では1ha以下が全体の65%を占める。一方、全人口の農業関連産業にかかわる割合は90%以上といわれており、典型的な農業国ではあるが、一戸当たり所有面積が非常に少ない、いびつな農業国である。

この国の果樹産業は今のところ前近代的で、流通を例にとっても、果物をグレード分けして売っていない。落葉果樹栽培ではまれに集団栽培があるが、それでも一戸で10数本のナシ樹（ネパール梨）を持ち、それを青田売りしている。青田売りはこの国の一般的風習である。バナナなど熱帯果樹栽培は歴史があるので、50本ぐらい栽植している農家が目につく。

果実は年中豊富に出回っているが、貯蔵施設がないため、一時を除いてインド産果実が市場を占有する。

こんな中、プロジェクトでは台木を使った苗木作り、普及員の再教育などを通じて、近代的果樹産業形成を手助けしている。

2 試験研究機関

この国においては、1960年代まで、農業試験研究が組織立てて行われた形跡はなく、果樹では王家が王宮内に世界各国より果樹の苗木を輸入して試作した例はある。なかでも、マンゴーの試作には成功し、普及させた。

1960年にインドとネパール政府の間で農業開発に関する協力関係が持たれたのが、組織だった試験研究の始まりである。この協定では、園芸関係では14か所に試作農場が設立された。協定は11年間継続され、世界各地から果樹を導入してそれらの評価、苗木生産配布、農家の短期研修などが実施され効果を上げた。その後、幾多の変遷があり現在は以下のようにになっているが、まだ形ばかりが整い中身が入っていない状況である。

① NARC (National agriculture research center)

ここでは、農業関連の試験研究のうち基礎的なものが行われるようになっており、園芸関係では6場所に支場を設けている。所長の位置づけは農業局長待遇。

② 農業普及センター (Agriculture development center)*

ここでは試験研究というタイトルを使うことは御法度。果樹の場合なら品種の保存、苗の配布、地域に苗木商の育成、加えて農家研修を行うことを主にしている。いわゆる官営農場の一種である。現在は12場所に支場を設けている。所長の位置づけは、本省の課長配下になっている。

さて果樹の試験研究を例にとると、NARCの本場では研究がなされておらず、NARC所属の地域の試験場では沢山の品種を維持管理しているのみで、研究のための予算はあるように思えない。我々のプロジェクトは後者に属している。

3 果樹の病害虫

我々が持ち込んだ落葉果樹では、幸いなことに開花期が乾季に当たるために発生病害は少ない。休眠期の防除をしっかりと行えば問題は少ないように思われる。今のところブドウでは黒とう病、輪紋病、ナシでは褐斑病、ミバエが主なものである。春先の乾燥が激しいためにスリップスの害が出る。柑橘ではすそ腐れ、グリーンング病がある。

いまネパールでは、病害虫防除はIPMで、との風潮が高まっている。試験研究機関があまり機能していない中、この語が一人歩きするとどうなるかという、散布は病気をみながらとなり、赴任間もない頃ブドウの黒とう病防除では大変な目にあった。先進国から科学者が発展途上国に乗り込んで、自分の持論を披露するのはよいが、色々なケースのあることを知らせる等、最後まで責任を持って欲しいものだ。

おわりに

この国でのムギの脱穀は、家畜に踏ませる、舗装道路に並べて車に踏ませる、石盤を斜めに立てかけてそれに打ちつける、などの方法がとられている。これは首都カトマンズ近郊で見られる光景だ。この例一つからみても、果樹産業を我々と肩を並べられるまでにするには、まだまだ時間が必要に思われる。

(ネパール園芸開発計画リーダー 佐久間 勉)

* 農業、園芸、畜産部門がある。